

入団までと入団後 (「東京バッハ合唱団 40 年の記録」補遺)

森永 毅彦 (団員)

人はどのような途を通して東京バッハ合唱団にいたるのであろうか。

1980 年 10 月の初旬、私は夕刻早めに家を出て、目白聖公会に向かった。その集会所で毎週月曜日に東京バッハ合唱団の練習が行なわれていることを少し前に聞き及んでいた。その練習模様の「見学」に出かけたのである。

じつを言うと、それは私のためではなく、娘のための見学だった。数年前ドイツで暮らしていたころ、彼女は教会の合唱団に入って歌うという経験をした。そんなことから、帰国後なにかドイツ語で歌える適当な合唱団があれば、といったことが、時折わが家で話題になっていたのである。

さて、当時の集会所は、まだ建て替え前の木造の小さな建物で、渡り廊下を歩いて靴を脱いで上がるようになっていた。入ってみると、30 人足らずの男女が何脚かの木製のベンチに腰掛けて練習していた。聴いたことのない曲だった。いや知るはずもない。そもそも私はそれまでバッハのカンタータなど殆ど 1 曲も聴いたことがなかったのだ。なんでもその日は 1 週間後に長崎のレデンプトリスチン修道院での特別演奏会を控えて、最後の仕上げの練習をしているということであった。

カンタータ 4 番「キリストは死の縄目につながれたり」——ずっと後になって知ったのだが、これがその日の練習曲目だった。見学開始後数分、私はえも言われぬ衝撃にとらえられた。あの冒頭合唱。一つの声部のハレルヤがはじまると、すぐにつぎの声部のハレルヤが聞こえてくる、と思うまもなく息もつかせぬように各声部のハレルヤがつぎつぎに重なり合い、ここで声をあげ、あそこで呼応し、一気に滔々たる流れとなる。目もくらむような感情の大波が押し寄せてきた。あとの経過はおぼえていない。ただ、2 時間後には、私は東京バッハ合唱団の一員となって家路についたのである。

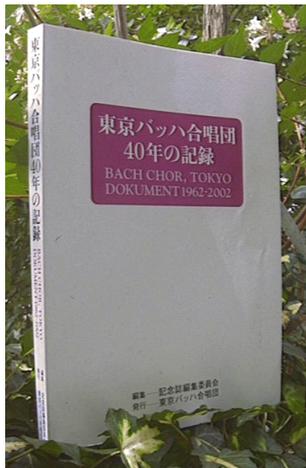
思い起こしてみると、この合唱団はバッハを日本語で演奏する団体だということは、そのとき全く音

識の外にあった。歌詞はどうでもいい、ということでは全くなかった。ただバッハの音楽、それがすべてだった。日本語による演奏の意味について考えるようになるのは、入団後のことである。(*)

さて、入団以後、私の生活は大きく変化した。義務教育の音楽の時間に歌ったのを最後として 30 年、「歌うこと」は遠い世界の出来事であった。少年時代、変声期に声を失って歌うことを断念せざるを得ないと覚悟したときの苦い思いが、よみがえってきた。しかし、あの見学の日以後、もはや歌うことのない生活は考えられなくなった。毎日家を出るとき、私は必ずバッハのコラールのメモを携えて行く。歩きながら、あるいは電車の中で、心の中で口ずさむ。メロディーと歌詞をしずかに味わう。これが 20 年来の日課である。チェリストのカザルスは、毎朝ピアノでバッハのプレリュードとフーガを 2 曲ずつ弾くのを欠かしたことがない、これはいわば日々の祈祷である、と述べているが、私の日課も、やや大げさに言えば、それに近い意味をもっているのである。〈これなしには自分は生きてゆけない〉という経験は、私の人生には少なくとも 3 つあるのだが、いまやバッハをうたうことがこれらに加わることになった。まことに、「図ラザリキ、楽ヲナスコトノココニ至ラントハ」、である。

(*) バッハにおける音楽と歌詞との関係は、ご承知のとおり大変難しい問題であり、軽々に論ずることはできない。あえて数語をもって私見をのべるならば、以下の如し、である。

まず、カンタータでは音楽自体に歌詞が含まれているのだから、歌詞を捨象して音楽を論ずることはできない。しかし他方、その関連は不可分ではあっても、いわば呼吸もできないほど拘束的なものであるわけではない。バッハが繰り返し「パロディー」を試みているということは、両者の関連を生きた自由なそれとして想定すべきことを物語るものである。日本語演奏の試みも、結局この自由とかかわってくる。



創立 40 周年記念祝会 最大規模で祝われる

7月1日、目白聖公会

創立 10 周年（1972 年、神田・学士会館）、20 周年（1982 年、本郷・学士会館）、30 周年（1992 年、新宿・獨逸亭）と、10 年の節目ごとにとくに盛大に祝われた創立記念日ですが、今回は『東京バッハ合唱団 40 年の記録』という画期的に意義深い出版物をおみやげに、団員、団友、後援会員、友人方、それぞれこれまでにない多数の方々が、一堂に会して祝うことができました。



◆カンタータ 1 番のコラールなどを全員で合唱

会の内容については、当日発行の特集号の予告にほぼ沿った形で進められましたので、ここでは簡単に、出席された方々のお名前を記録するにとどめます（敬称略）。

団友（5 名）安藤能成・啓子、河野裕道、南 吉衛、森井 眞

後援会員（17 名）白木博也、稲本佑子、木 勇、横河マリ子、大塚剛宏、宮崎恭子・美枝子、渡辺美恵子、中山絹子、川戸龍夫、松原典子、牧恵美子、青木道彦、石代礼子、藤田玲子、野村勝時、宇佐見邦輔

友人（4 名）今泉真知子、高野定子、伊藤貞子、長谷川安見

主宰者 大村恵美子、合唱団ピアニスト 石代佳子

ソプラノ団員（10 名）菅原文子、川合満里子、竹内匡枝、荒井せつ子、小口眞知子、柿沼徳子、菅原昌子、遠山香苗、片岡京子、田中弥生

アルト団員（12 名）高野京子、箕浦邦子、山下淑子、中村美子、三上裕子、森永孝子、小野久美、佐野庄子、中山ルミ子、松沢 望、平田輝子、石塚みゆき

テノール団員（4 名）大村健二、橋本眞行、島津欣矢、深澤源裕

バス団員（8 名）加藤剛男、山下広之、松尾茂春、森永毅彦、室田 悟、千葉光雄、渡辺冬二、片岡武彦
以上、出席者 62 名



◆団員を代表して B 加藤剛男氏が挨拶

「40 年の記録」感想

菅野 浩和（団友）

記念誌を、ありがとうございました。40 年間の足跡の確かさ、重さが滲み出ているように拝読しました。

バッハに関してはもとより、時代に向ける鋭いまなざしの反映（たとえば野村勝時さんの一文）などもあり、おぎなりの記念誌とは異なる内容感が心に響きました。

どうかこれからも誠実な、意義深い御活動が着々と積み重ねられますように御期待申し上げます。

フライブルク・バッハ合唱団指揮者

ボイアーレ氏からのおたより

フライブルク、2002 年 6 月 20 日
大村恵美子様

先日の日曜日には松山でお目にかかることができまして、大変うれしく存じました。もっと色々突っ込んでお話ししたいと思っておりましてのに、お別れパーティではつぎつぎと多数の合唱団員、オーケストラ団員、独唱者たちとの対応が待ち受けており、やっとこれが済んであなたとお話しようと思わしたときには、もうお立ちになる時間がせまっているご様子でした。

その後、東京バッハ合唱団について書かれているものを、多大な関心をもって拝見させていただきました。じつに並々ならぬたいへんなお仕事であり、

私としましては、ただひたすらこれをたたえて祝意を表することをうのみです。

言うまでもなくバッハの音楽は、われわれの深部に働きかけるものであり、それゆえに全世界的に理解可能なものです。しかし、そのためには、対象への深い沈潜を要しますし、これは多大の時間、知識、努力の投入、また対象への愛なくしては不可能です。このことはむろん、この芸術に近づこうとする者すべてにあてはまることです。しかし、われわれドイツ人は、この音楽とともに成長してきただけに、本当は奇蹟であるこの音楽をあまりに自明のあたりまえのことと考える危険が間々あるかもしれません。この音楽を母語として与えられていない人たち、これを理解するために、われわれに比してより多くの努力と忍耐を傾注する必要がある人たち、こういう人たちから、われわれがこの奇蹟への驚異と畏敬の念をふたたび学ぶこと、——これこそが、今回わたしどもが日本から携えて帰ることのできる最大の贈り物の一つなのです。

あなたの編集されたバッハのカンタータのピアノ伴奏譜つき楽譜のなかから10冊を、あなたはプレゼントとして私に手渡してくださいました（この中には私がとくに愛惜するいくつかのカンタータがふくまれています）。これらの楽譜によって、わたしどもへの上記の贈り物は、見事な仕方で、いまや私の目に見え、手にさわることができるものとなりました。どうか心からの感謝をお受け取りください！

私たちそれぞれの歩む道がふたたびどこかで出会い、じっくりと意見を交換する機会があたえられますよう、たのしみにしております。

心からご挨拶申し上げます。ご夫君にもどうぞよろしくお伝えください。



ハンス・ミヒャエル・ボイアーレ
(訳・森永毅彦)

2002年度団員総会議事録（要旨）

開催：6月24日（月）18:30～20:30、目白聖公会
出席者：17名、議事進行：B千葉

1. 2001年度（2001/7～2002/6）活動報告及び2002年度計画説明

1) 演奏会（実績）

2001/8/4 神山教会特別演奏会、12/16 第90回定期

演奏会、2002/5/12 第91回定期演奏会（創立40周年記念演奏会Ⅰ）

2) 演奏会（予定）

2002/8/3 神山教会特別演奏会、12/15 第92回定期演奏会（創立40周年記念演奏会Ⅱ）、2003/5月 第93回定期演奏会

3) その他の行事（実績）

2001/7/2 創立39周年記念懇親会・目白聖公会、7/22 第18回ばっはめいと夏の演奏会、8/2～5 野尻湖合宿と神山教会演奏会、12/17 合唱団クリスマス会

4) その他の行事（予定）

2002/7/1 創立40周年記念祝賀会・目白聖公会、7/21 第19回ばっはめいと夏の演奏会、8/1～4 野尻湖合宿と神山教会演奏会、12/16 合唱団クリスマス会・目白聖公会

5) 40周年記念誌

B松尾より今回の記念誌発行が報告された。（関係者に感謝）

2. 2001年度会計報告及び2002年度予算案の承認

1) 経常会計（A高野）、演奏会会計それぞれの係から2001年度決算及び2002年度予算の報告があり審議を経て承認された。経常・演奏会とも団員の増加またバザー（¥185,000）及び寄付（¥46,500）による臨時収入で赤字を回避することが出来た。2002年度も何とか収入支出のバランス予算を組むことが出来ている。

2) 後援会の会計について大村先生から御報告があった。

3. 2002年度 新委員及び係選定、（ ）：2001年度 パートリーダー

S：菅原、片岡（柿沼、菅原）

A：三上、梅干野（中山）

T：島津（島津）

B：室田、片岡（室田、松尾）

演奏会委員：B加藤、山下、松尾、室田、A田中、S荒井（全員留任）

会計係：A高野、山下、T深澤（高野、山下、丹羽）

広報係：B山下、松尾、S川合（留任）

企画係（練習スケジュール）：B片岡（丹羽）

テープ係：A小野、S宮田（A松沢、宮田、T柳沢）

楽譜係：A山崎、S中村（留任）

月報・資料係：T大村（留任）

名簿係：S片岡

合宿係：T島津・バス団員（S荒井・ソプラノ団員）

2001年度の係の方々ご苦勞様でした。新しくなられた方々宜しくおねがいます。（文責：片岡）

後援会 会計報告

2002年1月～3月

	内訳	(単位・円)
収入		273,100
後援会費	252,000	
寄付	21,100	
支出		491,535
事務局費補助	210,000	
渉外費	5,000	
通信費	142,934	
事務費	133,601	
雑費	0	
差引		△218,435
前期より		△188,041
累計		△406,476

【継続会員】(敬称略、以下同様)

植田高弘、近藤命、田中玲子、猪狩恭子、二宮久子、
 大切幸一、谷沢 守、大滝政昭、本田節子、佐川行子、
 宮島信子、福中脩、清田礼子、渡辺さち子、椿 信子、
 砂川治子

【新入会員】宇佐見邦輔

【寄付】植田高弘、大切幸一、岩瀬房子、宮島信子、
 バザー売上げ

【切手多数】安藤真保、中西碧、木梨利雄

2002年4月～6月

	内訳	(単位・円)
収入		302,000
後援会費	252,000	
寄付	50,000	
支出		436,816
事務局費補助	210,000	
渉外費	60,000	
通信費	96,620	
事務費	59,094	
雑費	11,102	
差引		△134,816
前期より		△406,476
累計		△541,292

【継続会員】(敬称略、以下同様)

森泉百合子、野村勝時、青木道彦、森永毅彦、阿部 啓、
 勝沼 淳、柳沢 清、藤田光男、丹羽 茂、星野弥生、
 楠 芳枝、出口禎子、荒井せつ子、内田美枝子、斉藤
 繁儀、鈴木玲子、宮崎恭子、山本恵子、大塚剛宏、
 吉村路子

【新入会員】中山昌子

【寄付】高崎弘子、匿名氏、秩父良子、福田花子

『東京バッハ合唱団 40 年の記録』

正誤表作成の お知らせとお願い

記念誌編集委員会

1年前から心して準備を進めた出版でしたが、創立記念日の当日にあたる7月1日に、参会者の方々にお手渡ししようというタイムリミットの制約から、原稿集めの最終段階と校了との時間が十分とれないまま、多くの記載漏れや校正ミスを残してしまいました。

これらをお読みいただいた皆様のご協力を得て、2002年12月頃に、正誤表の集大成にしてお配りしたいと考えています。お気づきの個所を、編集委員(松尾茂春、加藤剛男、山下広之、大村健二)までお教えいただけますよう、おねがい申し上げます。

連絡先: 松尾 E-Mail = bach@tky.3web.ne.jp

山下 E-Mail = Yamashitah@dream.com

事務局 = FAX、郵便、E-Mail 等で

ここでは、とりあえず定期演奏会関係の記録に関し、訂正・追加を記します。

28 ページの、小杉茂雄様(後援会員)の上演曲一覧表が貴重な手がかりですが、その中で削除が1曲あります。これは当委員会の責任ですので、小杉様にもお詫びいたします。これは、月報のどこかでカンタータ 186 番と間違えて、既演曲の中に数えたのではないかと思います。

正誤表 1

該当個所	誤	正
28 頁 下から 7 行	136	(削除)

253 ページ以降の年表には、過去 91 回分の定期演奏会が全部記録されていますが、その中の誤りを列記します。ドイツ演奏旅行の個所の訂正も加えました。

正誤表 2

該当個所	誤	正
276 頁 1983.12.9	カンタータ15 番	カンタータ151 番
277 頁 1984.5.26	カンタータ17 番	カンタータ173 番
284 頁 1991.5.25	カンタータ4、2 番	カンタータ42 番
289 頁 1994.12.17	カンタータ2、3、5、104 番	カンタータ65 番、 「クリスマス・オラトリオ」 I・II・III
293 頁 1997.8.14	カンタータ15 番	カンタータ150 番
293 頁 1997.8.15	〃	〃
293 頁 1994.12.20	T:佐伯雅美	T:佐伯雅巳